

新聞スクラップ

1 これぞ「NIEタイム」の基本形

「NIEタイム」は、小学校低学年から高校生まで、全ての校種・学年で実施することができる活動です。その活動形態や「めあて」も、さまざまです。その中で、最も基本的で普遍的な実践が「新聞スクラップ」の活動です。スクラップは、新聞活用の入門編・基礎編であるとともに、生涯学習の究極の姿であるとも言えます。活動日は、週に1回か2回、「朝読書」の一環として実施している学校が多く、時間帯は朝の始業前の10分から15分間、長くても20分というものがほとんどです。

2 どんな活動を行うか

- ①「朝読書」と同じように、全く自由に、子供自身が自分の興味関心のおもむくままに、新聞記事を選び、切り抜き、貼っていきます。基本的に、教師による指示や評価は行いません。
- ②おおざっぱな「新聞記事選択の視点」や「テーマ」を決めてスクラップします。例えば、「明るい話題をさがそう」「ハッピーニュースをさがそう」とか「ビックリしたニュースをさがそう」「季節感のある記事をさがそう」「今日一番のニュースをさがそう」など、です。
- ③より視点を絞ったテーマで記事探しをします。例えば、「環境問題に関連した記事を探そう」（他に、原発問題・農業問題・健康問題・ゴミ問題・いじめ問題などさまざま）など。それを年間テーマあるいは学期のテーマにする場合と、1週間～1か月ぐらいの短期間のテーマにする場合があります。いずれも、テーマを教師が指定する場合と、子供たちが話し合って決める場合と、子供たち個人が自主的に決めてよいとすることがあります。
- ④毎回、教師が具体的な「課題」を決めて、子供た



ちに記事探しをさせる実践例もあります。小学校の低～中学年で比較的に多いようです。例えば、「楽しい写真をさがそう」「笑顔をさがそう」「季節をさがそう」「カタカナをさがそう」「木への漢字をさがそう」「一番大きい字、一番小さい字をさがそう」「外国の国名や地名や人名をさがそう」「夏をさがそう」など、です。

- ⑤「まわし読みスクラップ」という活動もあります。これは、学級で数冊のスクラップブック（ノート）を用意し、それにある子が選んだ記事をスクラップして貼り付け、簡単なコメントを記入。次の人に回します。受け取った子は、その記事やコメントについて自分の考えを付け加えたり、自分が選んだ記事を新たに貼ったりして、また次の人に回していくという方式です。学級内でスクラップブックが飛び交い、交流が深まっています。

3 何にスクラップしていくか

- ①市販のスクラップブック
- ②大学ノート
- ③教師制作の「スクラップカード」
- ④レターファイル
- ⑤クリアファイル
- ⑥紙袋方式

⑦その他

4 子供同士の交流や学びあいは

- ①作業は個人ごとに行い、スクラップカードを掲示板に掲示、あるいはノートテーブル上に展示して、グループ（班）内で相互に見合います。それに付箋を貼って感想や疑問や意見を書き入れ、交流することも可能です。
- ②グループ（班）ごとに、お互いのスクラップを見せながら簡単にプレゼンして交流しあいます。ただし、時間配分（制限時間）を設定しないと時間が延びてしまいがちですので、注意が必要です。
- ③グループの中で、「今日のベストスクラップ」を選び、全体の前で発表したり、指定の場所に掲示したりします。学級－学年－全校段階で選び、「スクラップ大賞」を表彰している実践例もあります。選ぶのは、子供だったり教師だったり校長だったり、さまざまです。
学級の中で子供が投票し、「S-1GP」（スクラップ・ワン・グランプリ）を選んでいるところもあります。
- ④内容の優れたスクラップをプリントして配布することも考えられます。

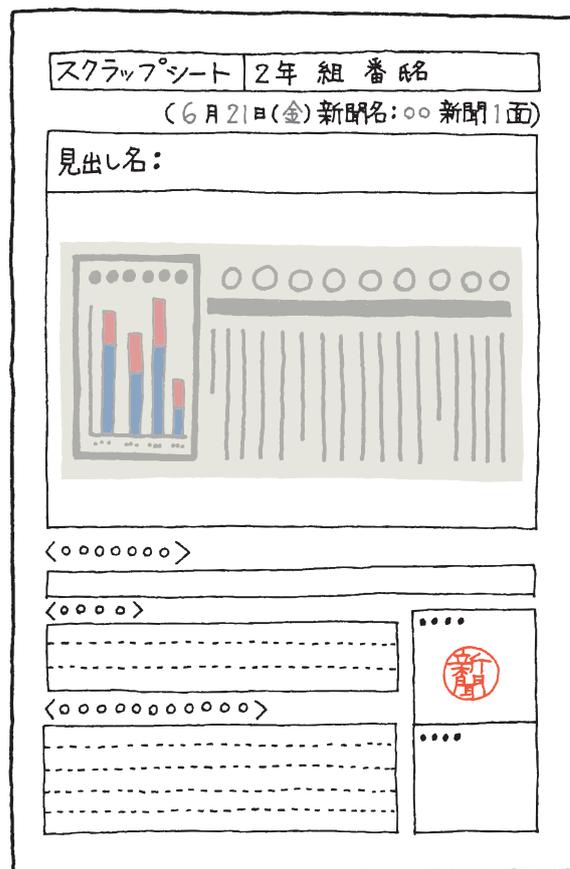
5 評価は

「朝読書」と同じように、教師による「評点」的な評価はしないということが基本ですが、提出されたスクラップカード（ノート）を教師がチェックして、一言コメントを書き添えて返却する場合があります。「確かに見ました」という証の検印を押すのみという場合もあります。いずれにしても、子供にも教師にもあまり負担にならない方式が望まれます。

6 新聞をどう調達するか

できれば子供一人ひとりが、当日の新聞を1部ずつ手にすることが望ましいと思います。しかし、現実にはそれは困難な学校が多いでしょう。そこで、全国ではさまざまな工夫や試みがなされています。

- ①基本的に各家庭で購読している新聞を持参してもらいます。その日の新聞でなくてもかまいません。



●スクラップシートの例

新聞を定期購読していない家庭もありますので、購読家庭に過去の新聞を提供してもらいます。持ってこれない子がづらい思いをしなくてすむ配慮として、持参した新聞や学校側で用意した新聞を1か所に積んでおき、自由に持って行くシステムにするとよいでしょう。

- ②「教材費」の一つとして児童生徒から新聞代を徴収している学校も、少数ながら存在します。
- ③学校の予算で購入するケースもあります。
- ④学校用教材価格を設定している新聞社があります。この割引価格を利用して学校単位（あるいは教育委員会単位）で購入しているケースも見られます。
- ⑤新聞は、一人1部でなくても、グループに1部配り、面ごとにバラバラにして、それを順繰りに回し読みしても、効果はほとんど変わりません。あまり過去のものでなければ、当日の新聞でなくても構いません。
- ⑥図書館に配備されている新聞を利用する方法もあります。
文部科学省は、2017年度を初年度とする第5次「学校図書館図書整備等5か年計画」を策定し、

こんな記事 見つけた！

小学校 年 組 氏名()
 月 日 新聞 朝刊・夕刊

こんなことがわかった！ 思った！ かんがえた！

.....

.....

.....

.....

記事をここにはります

_____から

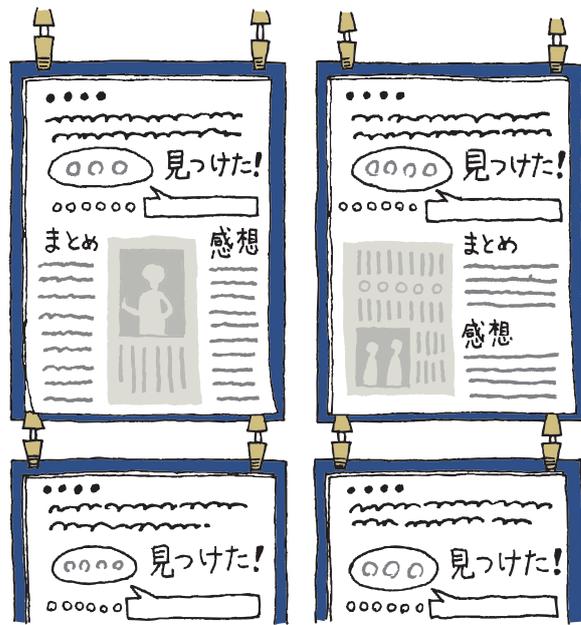
●スクラップシートの例

新聞配備に5年間で約150億円を財政措置しています。これは学校図書館に新聞を小学校で1紙、中学校で2紙、高校で4紙を配備できる額です。

以上いずれの場合も、「情報というのは、タダではない。多くの人の手と経費をかけて作られ届けられるものである」ことを子供たちにしっかり認識させたいものです。

7 実施にあたっての留意点

- ①「通常の授業」ではないことを肝に銘じておきたいと思います。「楽しい」「面白くて役に立つ」活動になるようにしたいものです。
- ②できれば学校全体で取り組みましょう。学年ごと学級ごとの実施も可能です。各学校や職員組織の実態に合わせた無理のない実施が望まれます。



●掲示例

- ③経験や工夫、子供の声などの交流を通じて、自校や子供の実態に応じたよりよい方法を模索していきましょう。

8 子供たちの声から

- はさみをじょうずにつかえるようになった。(小1)
- 新聞がおもしろくなった。(小3)
- はじめはめんどくさいと思っていたけれど、だんだん新聞のおもしろさに引き込まれるようになった。(小5)
- 世の中や世界のことに興味を持つようになった。(小5)
- 人の気づかない小さなニュースを見つけるのが楽しい。(小5)
- 母や父と記事を紹介しあうようになった。(小6)
- 続けることの大切さが分かった。(中1)
- 家でも新聞をめくるようになった。(中2)
- 記事のキーワードや重要な箇所が短時間で見つかるようになった。(中2)
- これは小論文訓練に役立つ。(高3)

新聞記事をもとに 「1分間スピーチ」

「新聞スクラップ」に次いで「NIEタイム」で行われることの多い活動です。「1分間スピーチ」や「1分間プレゼン」と呼ばれ、小学校から高校まで、発達段階に応じていろいろな形で行うことができます。時間も「30秒」から可能ですが、逆にたっぷり「3分間」で行っている学校もあります。

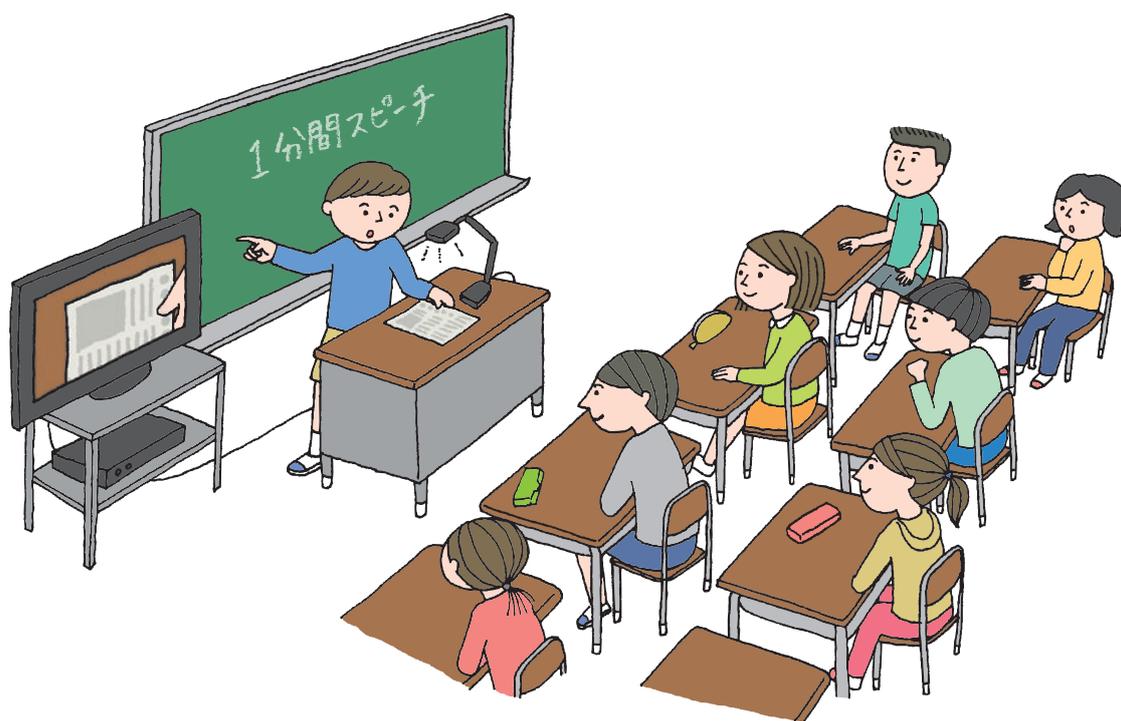
(1) 小中学校の場合、その日の日直（ほとんどの場合2人）が担当することが多いようですが、係活動の日直とは別に、出席簿順とか、班ごととか、2人ペアでとか、希望順とか、さまざまなローテーションが可能です。1回の人数も、1人から3人ぐらいまで、これに当てることのできる時間に応じて加減できます。ただ、スピーチを聞いた後の、質問や意見のやりとり、教師のコメント、一言感想を書くなどの活動を入れるとなると、1回1人、多くて2人が精一杯でしょう。

以上の方式では、発表の順番がなかなか回ってこない、意見交換の機会や時間も限られるとい

う弱点があります。その解決法の一つとして、生活班やグループ内で発表し合うという方式も考えられます。全体会とグループ（分科会）とを交互に行ったり、グループの代表が全体に発表したりと、いろいろなバリエーションが可能です。

(2) 取り上げる記事は、発表者に全て任せる場合と、あらかじめ定めた大テーマの枠内で探させる場合が考えられます。テーマの例としては、「今日のお勧め記事」「私のトップニュース」「この人に注目」などのおおざっぱなものから、「国際ニュースから探そう」「これでいいのかと思う出来事を見つけよう」「中学生が関わっているニュース」「お仕事発見」「環境問題」「進路を考える」などのテーマを、ある期間限定で定める方法があります。

(3) 1分間で話せる字数は、300字前後です。事前にスピーチ原稿を書く場合は、300字を目安



にさせるとよいでしょう。自分用のメモだけで臨んでも構わないと思います。いずれの場合も気を付けなければならないのは、原稿やメモに引きずられて、それをただ読むだけの発表になりがちなこと。あくまでも、この活動の主なねらいは「スピーチ」「プレゼンテーション」の力を育んでいくことです。できるだけ「原稿なし」または「メモをチラチラ見ながら」、顔を上げ、聞き手の方を向き、反応を見ながら話をする習慣をつけていきたいと思ひます。

- (4) スピーチの内容や組み立ては、基本的に子供自身に任せてよいと思ひますが、あらかじめ基本のパターンを定めておくという方法もあります。
- ①記事の概要の紹介（何について報じられているかというテーマと記事の要約）
 - ②どうしてその記事を選んだかという理由（興味関心、自分なりの意味づけ）
 - ③その記事に対する自分の感想や考え（可能ならば賛成・反対の表明も）
- (5) 「30秒てきぱきプレゼン」を提唱している斎藤孝・明治大学教授は、
- ①メインメッセージ（見出しをもとに）

- ②補足情報（なぜ？ どういうこと？）
 - ③影響や意義など（どんな効果？）
 - ④コメント（なぜこの記事を選んだのか？ どう思った？ 賛成・反対やアイデア）
- の4項目からなるワークシートをモデルとして提示しています。

（斎藤孝『新聞で学力を伸ばす』朝日新聞出版、2010）

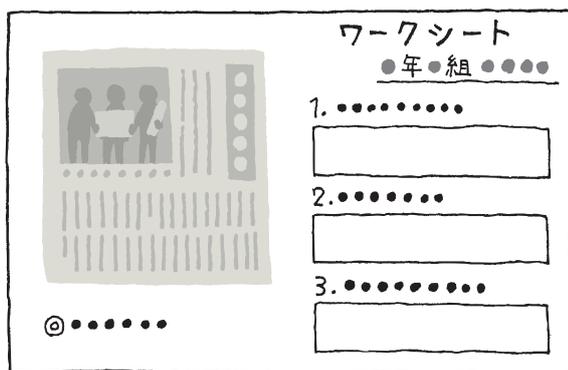
- (6) 人前で話をするのが苦手な子供がいます。それ以前に、話の素材となる新聞記事をなかなか見つけられないという子供もいます。この時間が大きな苦痛となったり、人前で「恥をかく」体験にならないような配慮が必要です。教師が事前に相談に乗ったり、ヒントを出したり、ときには練習に付き合ったり、サポート役の子供を付けたりと、「大変だったけど、やってよかった」「成長が実感できた」体験になるようにしてあげたいものです。
- (7) 終了後、取り上げた新聞記事の切り抜きを、原稿があればそれとともに、教室内に掲示するとよいと思ひます。それに付箋を貼るなどして、コメントを書けるようにし、友達同士の感想交流が図れるとよりよいでしょう。

ワークシートを使って

NIEタイムには、新聞記事とそれをもとした幾つかの課題を印刷した用紙を配布し、その課題を子供たちが解いていく「ワークシート」方式があります。一定のねらいを持って新聞記事を読み、考え、表現させたいと意図するときには有効な活動です。1枚の用紙に印刷し、全員同じ課題に取り組むもので、子供たちへの資料配布が簡易に行えるなどのメリットもあります

(1)「ワークシート」は、

- ①一人または数人の担当教員が作成する。
 - ②校長や教頭・副校長・主任などの管理職が作成する。
 - ③教員が持ち回りで作成する。
 - ④生徒が作成する。
 - ⑤新聞社がウェブ上で提供している無料の「ワークシート」を利用する。
- などの方法があります。



(2)「ワークシート」を配り、子供たちが「問題」に取り組んだあと、その場で発表する場合と、シートを提出・回収する場合があります。

(3) ワークシートを使う方式は、必然的に、その後の処理（評価）が必要になってきます。

- ①模範解答（記述）を掲示して、それぞれが自己評価（採点）する。
- ②教師が、コメント（赤ペン）を書いて返却する。
- ③優秀作を、モデルとして掲示する。学級通信・学年通信等で紹介する。
- ④作品をファイルやノートに集積していく。

など、さまざまな方法がありますが、いずれにしても通常の学習評価とはひと味違った、子供たちに喜びと意欲と自信をもたらすような肯定的な評価でありたいと思います。そのためにも、あまり勉強的な課題を設定しないようにしたいものです。また、教師にとってこの評価が大きな負担となることは避けたいと思います。

(4) 各新聞社がそれぞれの紙面を素材とした独自の「ワークシート」を紙面に載せたり、冊子化したり、ネットで配信したりしています。詳細については、各新聞社にお問い合わせください。
<http://www.pressnet.or.jp/member/>



「いっしょに読もう！新聞コンクール」の手法を使って

興味のわいた新聞記事を選び、その記事のテーマについて家族や知人・友達など他の人の感想や意見を聞きとり、自分の意見を添えて発表する活動です。日本新聞協会が主催している「いっしょに読もう！新聞コンクール」の簡易版と言える方法です。



- (1) 基本的に、日本新聞協会が作成したシート、またはその簡易版を教師自ら作成して行います。
- (2) 校内で行う場合は、同級生、先輩、下級生、教職員などが意見を聞いたり、話したりする対象になります。家庭学習の課題とする場合は、親やきょうだい、親戚、知人などが対象となります。
- (3) 「NIEタイム」の時間は、事前に書いてきたシートを基にした発表と交流（質疑応答、教師からのコメント等）を中心に行います。

- (4) 発表は、まずグループ内で行い、その中から選ばれたものを全体の前で発表、あるいは順番に全員が当たるようにします。
- (5) 発表後、あるいはシート提出後は、適切な場所に掲示して交流し合えるようにします。
- (6) 教師による一言コメント（肯定的評価）が書かれた上で返却されるとよいと思います。

いっしょに読もう！新聞を シート	
_____ 学校 年 組 氏名	
①この記事を選んだ理由と、記事を読んで思ったこと、考えたことを書いてください（150字～200字以内）	
_____ _____ _____ _____	
②家族や友だちなどにも記事を読んでもらい、その人の意見を聞きとって書いてください（150字以内）	
記入例 母は「○○」と言っていました。／父の意見は○○です。	
意見を聞いた人	父・母・兄・弟・姉・妹・祖父・祖母・友人 その他（ _____ ） ※当てはまる区分を○で囲んでください
_____ _____ _____	
③話し合った後のあなたの意見や提案・提言を書いてください（300字～400字以内）	
_____ _____ _____	

●切り抜いた新聞記事を貼り付けてください
(大きいときは、折り曲げてください。表紙に記入した新聞紙名、日付を確認してください。)

新聞クイズ

「ゲーミフィケーション」の手法を利用して「新聞に親しむ」「新聞を知る」ことを主なねらいとする活動です。



(1) 「ゲーミフィケーション」とは、ゲーム的な要素をゲーム以外の分野に組み込むことで、ユーザーのモチベーションなどを高める手法です。ビジネスや教育など、いろいろな分野に応用されています。

- 子供たちを熱中させるゲームでは、プレーヤーは、
- ①「習得している」「成長している」「進歩している」ことが目に見える形で実感できるように仕組まれている。＝「結果の可視化」
 - ②成果に見合った報酬がある。＝「トークン(特典)システム」(ポイント、カード、グッズ、お祝い、称賛など)

(2) 新聞1部を丸ごと使い、その中から得られるさまざまなニュース、出来事をもとに「クイズ」を作り、出題して子供たちが答える活動を、短時間でゲーム的に行います。1回につき1題が基本です。

- ①出題 ②新聞をめくりながら答えを探す ③答えの発表 ④出題者による解説、意見交換と進めるとよいでしょう。

(3) クイズの問題は、教師が作成する場合と、子供自身が作る場合があります。小学校低学年から高校まで、初級～中級～上級とさまざまなレベルのクイズが可能です。

以下はクイズの出題例です。

【初級】

- 新聞の定価は1部いくら？ 新聞のどこに書いてあるかさがしてみよう。
- 一番大きな字はどこにある？
- 一番小さな字は？
- 〇〇市の明日の日の出は何時何分？
- 今日の新聞の中に載っている金額で一番大きい

のは？

- 今日開催されるスポーツの試合を一つあげてください。

【中級】

- 昨日、〇〇の市場では「LLの卵」1kgの平均価格はいくらでしたか？
- 昨日の最低気温、日本で一番低いのはどこで、何度？ 最高気温が高かったのは？
- スキー場で今一番雪が多いのはどこで、何メートル？
- 〇〇市で見られるテレビで、夜一番遅くまで放映しているチャンネルは？
- この新聞は何年創刊で、今創刊何年ぐらいになりますか？
- 記事について感想や意見を言いたいと思います。どこへ電話・FAX・メールをしたらよいでしょうか？

【上級】

- 首相は昨日の午前中どこで何をしていましたか？
- 昨日は、その前日に比べて円高でしたか円安でしたか？
- 今日の社説のテーマは何ですか？
- 昨日の「ニューヨーク・タイムズ」と「人民日報」のトップニュースは？
- 川柳欄があれば、その中から好きな一句を選んで、その面白さを解説してください。
- 今日の新聞広告の中であなたが一番「面白い」「よくできている」と思う広告は？

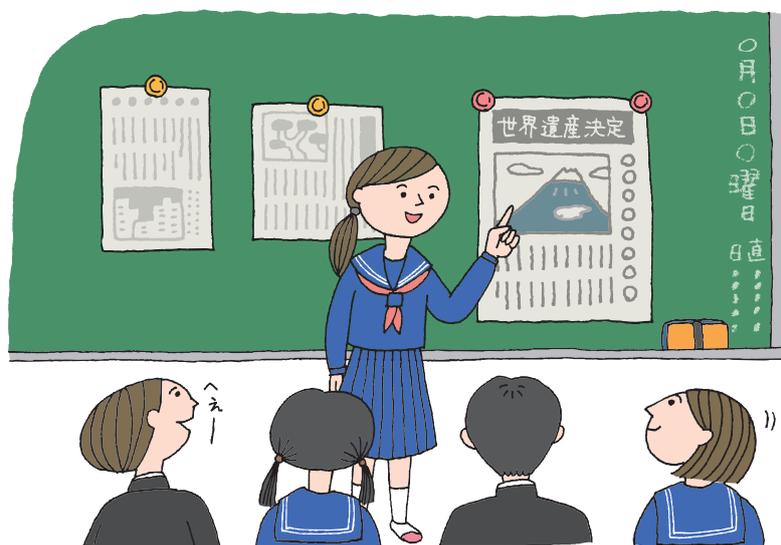
学習したことに関連した ニュースを探そう

学校の学習は、単元ごとに一区切りとなり、次の単元に移行します。そのため学んだことを定着させたり発展させたりする機会が乏しいくらいがあります。新聞を活用すると、その欠点を補完することが可能です。現在学んでいる内容に直接関連した記事だけでなく、かつて学習した内容に関わる新聞記事に子供が気づきスクラップすること自体に価値があります。

- (1) 教室のどこかに、各教科の年間学習予定を一覧にして掲示しておくといでしょう。既習の単元は色分けして分かるようにしておきます。これは、児童生徒自身が、学習の主体者として見通しと振り返りをしていく手立てとなります。
- (2) 教室の掲示コーナーに余裕があれば、教科ごとの掲示スペースを確保し、切り抜いた記事を掲示します。その場所がなければ、教科ごとのスクラップブックまたはファイルをつくり、その中を単元ごとに区切り、該当する記事を貼ったり封入していったりします。
- (3) このファイルの集積は、次年度の学習資料集と

しても生きていくはずです。

- (4) 学習したことに関連した記事探しは、生徒の自主的な活動が基本ですが、教師も積極的に行いたいと思います。「こんな記事があったよ」「学習したことに関連する記事っていろいろあるんだね」。この動機付けが、生徒の意欲を引き出すでしょう。
- (5) これは、スクラップ活動を基本とした「NIEタイム」の中で、該当記事が見つかった時に随時取り入れるという方法も考えられます。
- (6) 記事の例としては、例えば「歴史学習の事実を書き換えるような発見について報じた記事」「地球温暖化の最新情報」「言葉の使い方に関する文化庁の発表」「日食についての情報」「国際問題の現状や課題を取り上げた記事」「アスリートのトレーニング法や生き方についてのインタビュー記事」「教科書に載っている文学作品の作者についての新情報が載っている記事」「スマホやSNSの危険が現実になった事件の記事」「憲法や法律に関わる記事」「新しい工業製品の紹介記事」などなど、多岐にわたります。



この人に学ぶ

新聞情報の中で量的にも重要度から言っても最も多いのは「人間」に関わる情報であると思います。新聞は「人間理解」の宝庫です。「あこがれ」の対象になる人、「スゴイ、こんな人になりたい」「ステキな生き方だな」「こういう生き方もあったのか」「こんな仕事に就きたい、こんな活動をしてみたい」など、スポーツ選手や芸能人だけでなく、古今東西、有名無名、各世代（特に同世代）の生身の人の実績が載っている記事に注目させたいものです。定番の「人」紹介欄をはじめ、コラムや投書、ニュース記事の中でも見つけ出すことができます。犯罪や事件に関係する人の報道も少なからずありますが、「NIEタイム」ではモデルとなる生き方やあり方に学ぶことを基本にするとよいでしょう。

- (1) 「1分間スピーチ」と同様に、1回に発表者は1人または2人ぐらいが適当です。
- (2) 該当の記事を、実物投影機やスキャナーを使って電子黒板に投影しながら紹介をするとよいでしょう。
- (3) 発表する記事は、切り抜いたままでよしとする場合とあらかじめ作っておいた指定のワークシートに貼る方式とがあります。発表（スピーチ）

の準備は、前者の場合は「メモ」程度でも可としますが、後者の場合は一定字数に「文章化」して臨むこととなります。

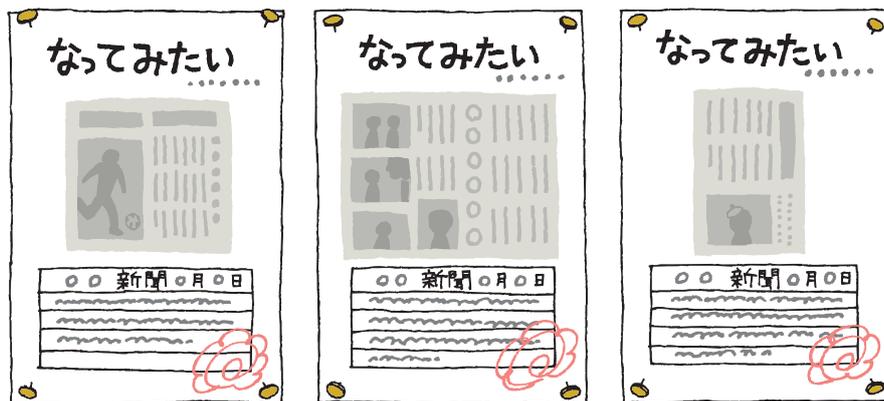
(4) ワークシートの例：

この人に_____を見つけた！

☆新聞には「人」の情報がたくさん載っています。新聞から「こんな人」「すごい人」「ユニーク人」「気になる人」を見つけ、人の「やさしさ」「愛」「ぬくもり」「がんばり」「笑顔」「喜び」「楽しみ」「かなしみ」「怒り」「不思議」「疑問」……などを見つけてみましょう。

平成 年 月 日 新聞 刊

 学校 年 氏名



●人に学ぶスクラップカード：「こんな人になってみたいな」

高等学校でのNIEタイム

小 学校・中学校に比べて、高等学校でのNIEタイムの実践はさほど多くありません。しかし実施している学校では、大きな成果を上げています。各地の高校で今まで行われてきた実践例の幾つかを紹介し（掲載に当たり、実践内容を簡略化したり整理したりまとめたりしましたので、該当校の実践そのものでないことをご了解ください）。

【実践例】

1 A高校での実践例「Manabee Morning」 （マナビー・モーニング）

- (1) 朝のHR（ホームルーム）での新聞活用。登校直後、短時間であっても心を落ち着けて文章を読む時間を取ることによって「前向きにがんばろう」という気持ちになってほしいと願っての活動である。
- (2) 主に「投書欄」や短めの「コラム」から、3分間で読み切ることができる長さのものを選ぶ。生徒の語彙力などを念頭に置き、旬の話題や学校行事と関連のある話題、生徒の成長を後押しできそうな話題を選ぶ。また、記事への橋渡しになるよう、毎回短い紹介文を添えて印刷している。
- (3) 記事選びは、主に「まなび支援部」の教師（3人）が担当する。各学年の教師も交代で提供するようにして偏りがないように留意している。教室では、担任が紹介文とは別な角度からひと言添えて生徒に配り、黙読する生徒の表情を見守ったり、時には一緒に読んだりしている。
- (4) 週に2回のペース。用紙はA4判の半分（A5判）に固定し、毎回ファイルに綴じるようにさせる。
- (5) 短い時間の中で「読むだけ」の活動であり、感想を書かせたり、発表したりはしないが、生徒からは「いい話だった」「自分でも新聞を読んでみようと思う」などの声が聞かれる。続けることによって、新聞を読むことに対する抵抗感が



和らぎ、生徒が少しずつ社会に目を向けるようになった。

2 B高校での実践例 「社説を読もう」

- (1) 進路指導部の教師が、新聞の社説をA4判の用紙に印刷する。3年の各学級担任がSHR（ショートホームルーム）時に生徒に配布。
- (2) 社説はネット配信されるので、フォーマットを作っておけば、簡単に印刷できる。
- (3) 読む読まないは、生徒に委ねられているが、全員に配布し、担任が配布時に一言添えることでより読まれるようになった。
- (4) 社会の動きに興味を持たせ、論述力を高める効果がある。

3 C高校での実践例 「NIEプロジェクト」

- (1) 週1回、朝礼時からLHR（ロングホームルーム）の時間にかけて全学年で実施。
- (2) 初期は、新聞社配信の「ワークシート」を利用していたが、順次、各学年の担当教員が、学年の実情に応じて、「記事をもとにしたワークシート」「コラムの書き写し」などを選んで実施し

ている。

- (3) 1年生は、タイムリーでレベルや内容も生徒の実態に合ったコラムや記事の「書き写し」を行っている。社会の出来事に幅広く関心を示すように工夫。生徒の書いた意見をまとめて配布しているクラスもある。
- (4) 2年生では、社会科の教師がオリジナルの「ワークシート」を作成し、全クラスに配布している。質問項目を工夫。教員が検印だけでなく、生徒の書いたコメントにラインを引いたり一言添えたりすると、次の意欲につながっていく。生徒の興味関心に差があることに対応することや、生徒がお互いにコメントを交流し合うことなどができるとよい。
- (5) 3年生では、入試面接や小論文対策に役立つ情報の収集に当てている。受験を間近にした高3の時期として、無理なく受験にも即利用できるような内容を心がけている。

4 D高校での実践例 「朝学習NIE」

- (1) 全学年全クラスが、1時間目の授業が始まる前の15分間(8:30~8:45)で実施。週に2回、あとは担任の裁量に任されている。
- (2) 国語科の教員が中心になって新聞社発行の「コラムノート」(記入欄1000字)を利用し、「要約」と「自分の考え」を書く小論文指導(文章指導)として行っている。
- (3) 取り上げる新聞記事は、各紙をバランスよく選ぶようにしている。学年やコースの特色を考慮しながら内容を選んでいる。
- (4) 週末の朝学習の時間に、課題の新聞記事を配布し、教員が解説。「週末課題」として生徒は土・日にノートに記入し、翌週の月曜か火曜の「朝学習NIE」の時間に発表してディスカッションする、という流れになっている。
- (5) コースによっては、これを「朝学習」でなく授業の中で行っているところもある。
- (6) 新聞記事を読み、考え、書くことで、読む力・書く力はもちろん語彙力・表現力が養われる。この取り組みによって、模試における国語の読解力の向上や小論文試験・面接試験での効果が期待されている。

5 E高校での実践例 「この記事に注目！」

- (1) 時間帯は、朝・昼・帰りのSHRのどれかを利用する。
- (2) 日直が日誌に、自分が読んで紹介したい記事の要約を書き、意見文を記入。
- (3) 記事のコピーまたは切り抜きを教室後ろの黒板に掲示する。
- (4) 記事は3日間掲示し、その後はNIE用ノートに貼付。
- (5) 記事の要約を、SHRで紹介することもある。
- (6) 新聞は家庭で読まれる一般紙に限定する。
- (7) 各学級で1紙購読。月ごとに新聞を変えることもある。費用は学校徴収金(家庭負担)。
- (8) ねらいと期待される効果
 - ①新聞の情報の広さ、奥深さ、思索へのつながりなどを知る。
 - ②級友の思考や表現力、判断力を学びあう契機となり相互の知的刺激を生む。
 - ③スマホだけでない新聞を通じた人間関係の改善や深まりにつながり、友人との視点の相違を学びながら、情報の選択のあり方を考えられる。
 - ④担任にとって、HR指導の幅の広がりになり、生徒は達成感を得て自己肯定感や自尊感情をもつことが期待できる。



6 F高校での実践例 「新聞を読む」

(1) 全学年で

登校～始業前の時間帯に、自主的に6紙の1面を比較読みさせる。担当教員が、毎朝、当日の新聞の第1面をコピーし、生徒昇降口に並べて張り出す。生徒の目に必ず触れる場所なので、生徒の興味をひくことができる。生徒たちがニュースについて話し合うきっかけになる。

(2) 校長の「NIE 掲示板」

昇降口と教室入り口付近の2か所に「NIE コーナー」を設け、校長が生徒に読んでほしい記事を随時掲示する。記事にはナンバーをつけておく。生徒は、その記事の中から週に一つを選び、指定のコメント用紙に、選んだ理由、自分の意見を書いて、現代文担当者に提出。担当者は点検後、校長に渡す。学校長から返事が来ることもある。生徒は校長とつながっていることが実感できる。担当教員も校長との連携やコミュニケーションがとれる。

(3) 2年生「今日のニュース」

週に1、2回、朝のSHRで行っている。家庭で新聞を購読していない場合もあるので、学年で1紙を購読。朝夕刊をクラス順に1部ずつ配置する（毎日2クラス、5日に1回以上まわってくる）。担任が教室に持っていき、気にな

る記事をひとこと紹介して教卓に置く。生徒は自由に新聞を手にとって読むことができる。担任が積極的に記事をコピーして掲示したり、授業やHRで話題にしたりすることもある。ねらいは、社会に向ける関心を養うことと、小論文・面接対策。週1～2回だと、新聞が多すぎるということがなく、整理しやすい。

(4) 理系クラス「新聞を読む」

現代文の授業のある日の朝のSHRでB4判のプリントを配布する。もらったプリントを読み、意見を書いて授業で提出。点検して次の授業で返却。記事を読むときに、なるほどと思ったところに青線、ちがうのではと思ったところには赤線を引く。授業時間数の少ない理系で、速読や書く力を養う。意見を書く分量は、1年間でかなり増え、内容も根拠のあるしっかりしたものになってくる。

7 G高校での実践例 「政経の授業時に新聞活用」

(1) 授業の冒頭で教師が政治経済に関係する新聞記事を紹介する。口頭で行うときも、印刷して配布し解説するときもある。

(2) 各自スクラップノートを作成、スクラップした記事について意見等を記述。週に1回は提出。良いものについて、授業の冒頭に紹介したり、掲示したり、ときには印刷して配布したりする。

8 H高校での実践例 「生物の授業時に新聞活用」

(1) 生徒に伝えたい「生物と関連する記事」があるとき、授業の最初に活用する。機械的に毎回使うわけではない。なぜこの記事を選び紹介したいのかを説明することで、生徒にはこちらの気持ちが伝わり取り組みへの意欲が高まる。元々教科書を使用して学ぶこと以外の時間がないので、臨機応変に扱う。

①記事は、1面・科学欄・家庭欄・社説・コラム・書評等、必要に応じて何でも使用する。

②解説欄はその説明や関連事項のこれまでの流れを活用し、1面ではニュース性のインパクトを伝える。

③教科書との関連は次の2通り。



- i) 前もって保存しておいた記事を関連する単元で活用する
- ii) 最新記事の活用では、まだ教えていない単元でも「数日前の新聞で伝えられた」というインパクトを重視してひとまず起きていることを予習的に紹介し、単元を教えるときにさらに原理も含めて学ばせる。

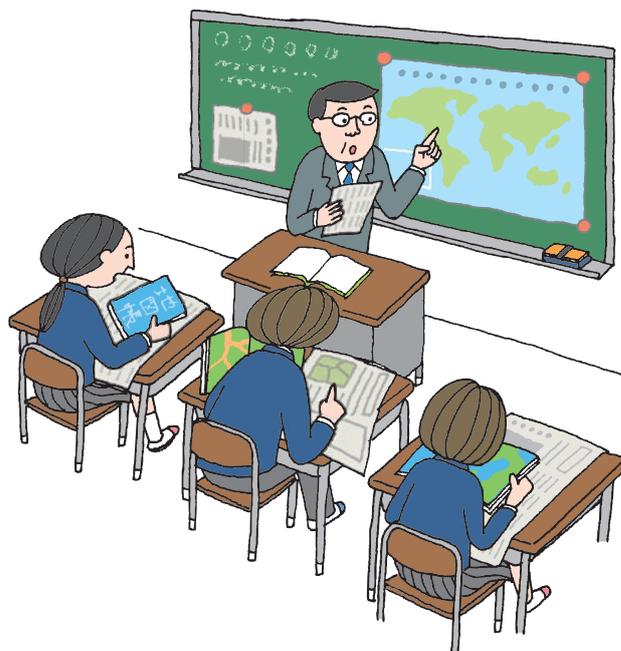
④具体的な展開

- i) 全員に記事のコピーを配布し、「2分あげるから記事を読みなさい。後で当てて何が書いてあったかを聞くので。読みながらポイントに線を引くと答えやすい」と伝え、時計を見て「始め」「止め」の合図をすると集中して読む。生徒の状況を見て時間は調整する。場合によっては、「まだ読み終わっていない人は？」と手をあげさせ、「では30秒あげるから」と言って追い込む。
- ii) 大事なのは正解かどうかではなく、記事を読み、考えたことである。何人かに当てると、ポイントはある程度揃う。答えられない場合も「何か分かったことを教えて」と言って巻き込む。最後に解説を行う。教科書とつなげられる場合は少し詳しく説明し、世の中で起きていることと教科書が関連していること、教科書のことを分かると世の中のことも理解しやすくなることを具体的に伝える。
- iii) 関連記事が続けて報道される場合もある。このときは授業で記事をシリーズとして使っていく、前の記事と次の記事の内容の違いも伝え、生徒は思わずその変遷に目を向ける。

(2) 教科担当者としての進路指導

教科を担当しているクラスの生徒で生物関係（看護医療・農学・理学・薬学他）の希望者に対して、内容的に関連する記事を見つけたらコピーを取り、授業時に個人的にその生徒に渡す。

- ①前もって趣旨を伝えておく。「今その学問分野ではこんな研究が行われている、こんなことが問題になっている、こんな興味深いことが見つかった、などの記事があったらその都度渡すようにしたい。もしほしい人がいたら申し出れば記事を渡そう」



これで教科書だけの授業から、世の中や進路ともつながる視点を生徒に伝えることができる。「何を学びに大学へ行くのか」を教科の立場でサポートする。

※これは生物の内容として行うのだが、結果として面接や小論文の内容が生徒の頭の中で構築されることにつながる。直前の付け焼刃ではなくなる。生徒は興味を持てばその方面に進学したいと思い、自ら勉強するものだ。教科担当者にしかできない進路指導である。

9 | 高校での実践例
「地理の授業時間にNIEタイム」

- (1) 4単位ある地理の授業時間の冒頭5~10分間を「NIEタイム」に当てる。
- (2) いろいろな方法で集めた新聞を生徒数分用意し、社会科教室後方の机の上に並べておく。生徒はここから自由に持って行き、終わったら元に戻す。
- (3) 自宅で新聞を購読していても、自ら読むという子はほとんどいない状況なので、最初の授業で「新聞ガイダンス」を行う。紙面に登場する人名や地名に○を付けたり、掲載写真に短いコメントを付け発表させたりする。
- (4) 次の時間からは、各面の内容を紹介しながら、自分が興味を持った記事を読ませる。大きな事件があったときなどは、教師の解説も入れる。

生徒はいろいろな地域から通ってきているので、地域版や版建てによって内容が違うことを知ることによって、新聞情報の地域性を学ばせることにもなる。

- (5) 慣れてきたら、地形・気候・資源・災害・民族・宗教など系統的地理学習の内容(テーマ)に関連する記事を探させるようにする。記事の見出しを書き写し、キーワードを見つけ、教科書との関連(単元名とページ)をメモすることから始める。例えば、「フィリピンにおける台風の被害」の記事を選んだときは、教科書の「気候環境」や「自然災害」の単元との関連を見つけるとともに、「国際協力」の単元での日本の災害支援との関連性を見いだす生徒もいる。
- (6) 市町村規模の地誌学習では、全国紙の地方版や地元紙を読むようにする。また、修学旅行前後に旅行先の地元紙を取り寄せたり、現地で買ったり、ウェブ版で読んだりして、事前学習で調べたことや現地で見聞きしたことと関連づけてとらえることができる。
- (7) 世界地誌学習においても、国際的なニュースを通して、「宗教」「民族」「国家・領域・国境」など系統的地理学習項目との関連に気づくことができる。
- (8) 生徒からは、「学習に関係する記事が意外に多いことに気づいた」「先生の解説があると理解が深まる」「地理の教科書と新聞記事が関係していることが理解できた」「これから学ぶ公民ではもっと関連がありそうだ」「家では新聞を

読む時間がないので授業で読むことができよかった」などの感想が寄せられた。

10 J中高一貫校での実践例「よりよく世界を知り、考え、そして行動する」

- (1) 「新聞から拾った私の意見」
朝礼の時間に新聞から題材を取り、そこから自分の意見を必ず入れて名簿順に1分間スピーチをする。朝礼があるたびに継続。切り抜いた新聞記事と自分の意見を書いた用紙を教室後ろの白いカレンダーの裏紙に日々蓄積し、発表後も学級の皆で振り返ってみることができるようにする。世の中のいろいろな動き・情勢が分かり、生徒おのこの個性や主張が明確になり、交流しあう良い機会となる。
- (2) 「新聞切り抜きご意見番」「新聞切り抜き調査隊」
各自スクラップブックをつくり、日々自分の好きな記事について切り抜きを行う。自分の意見を書いたり、時間の許す者は調べ学習をしたことをまとめたりして各自の都合のよいときに提出。担当教師がコメントを書いて返却する。自主的活動なので、毎日出す生徒もいる一方で、ほとんど出さない生徒もいる。教師の日々の負担はあるが、きちんと取り組んだ生徒の文章力の上達度や興味関心の広がり大きい。自分のペースでできる、自分一人だけでなく他の人の考えを見聞きするなどでつながり、継続性が出てくる。

その他のさまざまな取り組み

「NIEタイム」は、工夫次第でいろいろな活動が可能です。いままで紹介した以外にもたくさんの実践例が積み上げられてきました。右の活動もその一部です。



- 「みんなで1000人の顔写真を集めよう」
- 「マンガの吹き出しを考えよう」
- 「この記事に見出しを付けてみよう」
- コラムや社説の「書き写し」
- 「お気に入り写真集づくり」
- 「私のおすすめ記事紹介」
- 「今日のトップニュースはこれだ」
- 「今日のことば」
- 「今日の一面」
- 「今日の投書から」
- 新聞写真で「俳句・短歌づくり」
- 一つの記事で「話し合い」
- 「地域的话题を探そう」
- 「記事を比較してみました」
- 「今日のベストアスリート」
- 「今日のふしぎ」

